

武田清 『新劇とロシア演劇-築地小劇場の異文化接触』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 正昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16098

武田清『新劇とロシア演劇——築地小劇場の異文化接触』

中野正昭

タイトルを初めて見たとき、正直いって、一瞬この本が二〇一二年刊行だということを忘れそうになった。もはや半ば死語ともいえる「新劇」と「ロシア演劇」の組み合わせ、さらに副題には演劇学専攻の学生ですら知らない者がいる「築地小劇場」である。日本の近代演劇史を扱っている研究書とはいえ、あまりにストレート過ぎないだろうか、と。しかし本書を読み進めるうちに、実はこのタイトルの古めかしさもまた、築地小劇場におけるロシア演劇受容という歴史的事柄を題材に、歴史を超えた異文化接触の本質的な問題を論じるという本書の目的に適ったものだとわかる。

本書が扱うのは主に一九一〇〜三〇年代の新劇とロシ

ア演劇で、全部で五部・十七章から構成されている。第一部「新劇とメイエルホリド」では小山内薫を軸に築地小劇場でのメイエルホリド研究の内実が検証され、第二部「新劇とロシア演劇」では築地小劇場の機関誌に発表されたロシア演劇の記事を中心に当時のロシア演劇理解の実態が、第三部「佐野碩とメイエルホリド」ではメイエルホリドの助手を務め後にメキシコへと亡命した演出家・佐野碩を巡る数奇な事件——メイエルホリドの肅正、岡田嘉子と杉本良吉の逃避行——が、第四部「新劇とエヴレイノフ」では〈モノドラマ論〉〈人生の演劇化〉など独自の演劇論を展開したニコライ・エヴレイノフの影響が論じられる。大正・昭和初期はチェーホフに次ぐロ

シアの人気劇作家だったエヴレイノフだが、以後長らく忘れられた存在となっていた。ロシアのシアトリカリズム戯曲を代表するひとりであるエヴレイノフに関して、現在、日本語でまとまって読めるのは本書くらいだろう。そして第五部「ロシア演劇研究」では二本の論文、ニキータ・バリエフの芸術キャバレー「蝙蝠座」を中心とした「ロシア・キャバレー演劇の研究 一九〇八—一九二四」、社会喜劇が多数発表された時代である「ソ連ネットワークの社会喜劇について」が収められている。

本書では著者の武田氏が時折その姿を見せ、過去の複雑な演劇的事象へと丁寧に、時に大胆に読者を導いていくのだが、面白いのはその人柄だ。例えば第一部「新劇とメイエルホリド」、すなわち本書の最初で著者は自らの勘違いを読者にあかしてみせる。

思い込みというのは恐ろしい。恥をさらすことを承知で述べると、私は、日本におけるメイエルホリド研究には二筋の道が存在した、と固く信じ込んでいた。築地小劇場系のメイエルホリド研究と、左翼劇場へつながっていく佐野碩ら劇団ムンツのメンバーたちによるその二系列である。

しかし実際にはこの二つの系列はどちらもイギリスの演劇研究者ハントリー・カーターのルポルターージュに基づくもので、日本のメイエルホリド研究は一筋だったという。著者の判断を誤らせたのは前者の築地小劇場系の研究で、一九二八年に文芸部員達が刊行した書籍『メイエルホリド研究』は「この書を読むと、彼らは直接ロシア語文献・資料を通してメイエルホリドの演劇研究をした、という印象を受けるし、またそうした調子で記述されてもいる」こともあり、彼らのメイエルホリド研究はロシア・ソビエト直接経路だと予断してしまう結果となった。そして著者は、なぜ築地小劇場の文芸部員達が僅かな文献と断片的な情報だけで今日の私たちをも驚かせるような精緻な研究ができたのか、その謎へと筆を進め、さらに築地小劇場でのメイエルホリド研究の黒幕とも言うべき小山内薫のメイエルホリド観へと迫っていく。

築地小劇場の指導者のひとり小山内薫はスタニスラフスキーの舞台の実践的紹介者として有名だが、その晩年にスタニスラフスキー的なりアリズム演劇から離れてメイエルホリドのシアトリカルな演劇に関心を移す。小山内は兼ねてから模索していた「東西演劇の融合」の実現の可能性を歌舞伎を利用したメイエルホリドの舞台に探っ

たのではないかと考えられることもあり、このことの重

要性は例えば明治大学の故・曾田秀彦文学部教授の『小山内薫と二十世紀演劇』（勉成出版、一九九九）をはじめこれまでも指摘されてきた。が、ここには幾つかの解けない謎があった。特に奇妙なのは、ロシア十月革命十年記念式典に招待され訪ソすることになった小山内が「わたくしが主として見て来たいと思っっているのは、メイエルホルドの現在の仕事です。（略）あるだけの把握力を尽くして、出来るだけのもの擱んで来たいと思いません」と抱負を語ったにもかかわらず、帰国後はメイエルホルドについて沈黙ともとれる態度を取ったことだ。そして沈黙の一方で小山内は自らの東西演劇の融合を形にすべく『国性爺合戦』改作に没頭する。しかし不幸にも上演目前に彼は心臓麻痺で急逝してしまうのだった。

〈新劇の父〉小山内はメイエルホルドをどう考えていたのか、新しい演劇動向を知る上の関心にすぎなかったのか、それとも自身の演劇観を変化させる大きな存在だったのか。これは日本の近代演劇をめぐる大きなミステリーのひとつだ。本書の著者は口を閉ざす小山内に代わり、同じく記念式典で訪ソした他の日本人たちの文章に丁寧に当たって状況証拠を固め、遂にひとつの結論——小山

内が沈黙に至った動機をこう推測する。

小山内薫だけではなく、メイエルホルドの舞台を観た日本人たちの観劇記や回想を見てきたわけだが、後の時代の演劇史の評価とは違って、メイエルホルドの新演出、名演出とうたわれた舞台に対して、同時代にそれを観た日本人たちの評価はいささか辛辣なものがあった。（中略）欧米の研究者が書いた文献でのみ知っていて、まだ一度も観たことがなかったメイエルホルドの舞台に大きすぎる期待を抱いて訪ソした小山内薫にとって、実際にモスクワのメイエルホルドの舞台を観たものは、演目すべてではなかったにしろ、大きく期待外れだったのではないかということだ。

単純なようだがまさに盲点を突いた指摘である。これまでも小山内の文章を細かに分析しその演劇観の変遷を探ったり、彼が観たメイエルホルドの舞台を演劇史的意味付けから検討したものはあった。が、日本でメイエルホルドが一種の流行の最中であって、実際にその舞台を眼にした数少ない同時代の日本人の多くが実は辛辣な感想を持っていたことはこれまで殆ど知られてなかった

ろう。過去のある出来事を見る際、当然ながら私たちはその後の歴史を踏まえた上でその時代を見つめるのだが、そこには幾つかの落とし穴があることに改めて気づかされる。

そして特筆したいのは、ひとつひとつ証拠を丹念に集めては検証を繰り返し、時に視点を交え鋭利な論の展開を重ねながら意外な事実へと読む者を導く本書の各章が、まるで推理小説のような知的スリルと充実感を持っていることである。ここでの著者は読者に向かって事件を事件たらしめる要件を説明し、その事件の意味と謎を解き明かしてみせる名探偵だ。先の「思い込みというのは恐ろしい。恥をさらすことを承知で述べると」と語る心許ない著者の姿は、ちょうど横溝正史が金田一耕助を描くときと同じ仕掛けなのではないかとさえ思えてくる。

続けて著者は小山内がモスクワでの記念講演「日本演劇の将来に就いて」の中で語った「東西演劇の融合」の意味をこう説明する。これはメイエルホリドの舞台を直接指して言ったのではなかった、と。

ロシアの演出家が歌舞伎を研究して、その手法を著しく利用すると東西演劇の融合だと言っているのであれ

ば、小山内薫が歌舞伎の二世市川左団次と組んで、一門の歌舞伎役者を使って、イプセンやゴッリキーの戯曲を日本語に翻訳した台本を、写真を参考にして衣裳や髪を用意して、日本語で上演した舞台も東西演劇の融合ではないのか。なぜ今まで融合ではなくて、翻訳劇の上演だということになっていたのか。それは西洋演劇が日本演劇より優れているという先入見によるものであったと思われるのである。

さらに考えれば、西洋演劇が東洋演劇を研究して取り入れることが融合なら、そしてそれは日本の演劇人たちが多く赤面させてきたのだが、逆に東洋演劇が西洋演劇を研究して取り入れることもまた融合だと言えるわけで、そしておそらくそれは西洋の演劇人たちが見たら困惑させられるものだったろうと思つのである。相対化して考えてみれば、近代演劇は誤解にもとづくものであったとしても、相互にそうやって融合してきたのである。

ここに本書での著者の立場が、そして副題が「異文化理解」**「異文化受容」**ではなく「異文化接触」である理由が明確に語られている。異なる文化と文化が出会った

とき、そこで得られるものは相互の正しい理解だけではなく当然ながら誤解が含まれる。いや、誤解の方が多いと言ふべきだろう。しかし後に歴史化されるとき、特に受容という観点に立った場合、往々にしてそうした誤解は不要なものとして切り捨てられがちだ。しかし歴史を、ある過去のディテールの中から読み解こうとするとき、むしろ誤解こそがその時代を最もよく体現し、誤解を生む余地にこそその時代の特性をうかがい知ることができるとは言うまでもないだろう。異文化が接触することで生まれる衝撃、導入、否定、拒絶。その結果として立ちあらわれてくる新しい文化の創出や伝統の再創出。演劇だけでなく、外部としての他者を常に想定してきた近代の自己形成そのものが理解と受容だけでなく、誤解と融和の積み重ねでもあった。そして現在の私たちは過去にも増して、こうした異文化接触の時代の中で暮らしている。本書は、受容という観点からは見えてこない日本の近代演劇史の生の姿を巧みに描き出すと同時に、歴史を超えた異文化接触の本質的問題を論じている。

第一部以下、第二部から第四部まで異文化接触から生まれた誤解と融和が、やはり推理小説さながらに展開される。そして最後の第五部では築地小劇場の人々がその

実態を十分に把握していなかった、革命的演劇とは異なるロシア演劇の別の側面が、事件全体のもうひとつの背景として読者に明かされる。本書は各章、各部、そして全体を通じて歴史を超えた異文化接触の問題を学術的に扱いながらも、同時にそれを読み解く知的でミステリアスな喜びを与えることに成功した好著である。

日本の新劇を研究する者にとって多国籍にわたる影響関係の解明は不可欠だが、語学の壁は今も大きい。ロシア演劇を専門とする者は日本の新劇には関心が低い。その両者をつ結びつけ、一方だけでは見えてこない事象に第三の歴史とその文化的意味を見出す本書は、日本演劇研究書であり、ロシア演劇研究書であり、そしてそれ自体が異文化接触の見本でもある一冊となっている。